

巻頭言

「命」を根源においた社会にしていく 「よい仕事」

馬場 幹夫 (センター事業団専務補佐/東京統括本部長/会員)

3月2日～3日の全国よい仕事研究交流集会2019では、劇作家平田オリザさんと労協連古村伸宏さんとの記念企画、大田堯先生(日本子どもを守る会会長)の動画もありましたが、共通しているのは未来の社会づくりに向けて、「命」が根源的で大切であることを共有した集会でした。

大田堯先生はワーカーズコープの保育実践を「子育て」ではなく「子育て」であると言いました。「子育て」には、子ども自身が未来をつくる主体である意味を含んでいます。そして、「命」を3つの特徴から述べています。それは「命とは、顔もDNAも違うように同じ命は無い(命の重さはみんな一緒ですが)こと。2つ目は、自ら変わる力があること。3つ目が、かかわること」です。「違う・変わる・かかわる」はどれもつながっていますが、私はよい仕事を深め、実践する上で「かかわる」こと、つまり豊かな「関係性」をつくる場をどれだけつくれるのが大事だと考えています。

また平田オリザさん、大田先生から出てきた言葉として、「折り合いをつける」「前向きな不完全さ」もありま

した。「みんな違ってみんな大変」であることを超えて生きていく時代において、高度経済成長の時代のように、経済成長と幸福が一体ではない時代が今になります。そして大変な現代を乗り越えるキーワードとして、「対話」「協同決定=合意形成能力」があげられていました。Aの意見、Bの意見があったときに、AとBどちらの意見でもなくCという結論を編み出していく対話、その違う結論になる喜びを感じられる時代だということでした。私はその話を聞いて、一つの色に染めていくのではなく、一人ひとりの違い・多様性を認め合い、受け止めあえる対話力が必要であり、新しい社会づくりに向けて、当たり前であることの新鮮さを感じました。

センター事業団東京の組合員の個人レポートを読むと、すでに対話を通じた取り組みを実践していることがわかり圧倒されました。一つ紹介します。東京の武蔵野市にある「テンミリオンハウスきんもくせい」所長の高田夏子さんは命を踏まえたレポートを書いていました。

【「自分が幸せでなければ人を幸せ

にできない」-自分に腹がたったり、他人に腹が立ったりしたときは、一歩引いて、相手がどうして自分には理解出来ない行動をされているのか(相手にとってなぜそれが正当なのか)客観的に状況を見極めて、絡まった糸をほぐしていく作業だと思います。誰もが同じ思いで働いているのではないこと、全員の言い分に公平に耳を傾けていくことがよい職場にしていく第1歩だと思います。よい暮らしも同様です。協同労働を伝えることは、言葉より実践だと思います。実践した後で、これは協同労働だからできたと言葉で説明することが大切です。】

「よい仕事とは、よい職場・よい暮らしにある」と一つに重ねているのが印象的で、高田所長がよい職場を作り上げていく上で、一人ひとり信じていく強さを感じました。

2日間の全国よい仕事研究交流集会では、協同労働を実践する際に大事にしていくこととして、自らの「弱さ」「未熟さ」「苦しさ」を仲間や地域に率直にさらけだせているかどうかが必要だと感じました。1日目の全体会パネルディスカッションのコメントーターの北海道大学宮崎隆志先生からは「ワークスコープの30年の歩みは、2層(入札・委託・指定管理等)の事業・運動で鍛えられた経験が、生きづらさを抱えた当事者が立ち上がる取り組み、地域

の人たちを主体になる取り組みに活かされているのではないか」とのコメントがありました。これは全国のワークスコープで働く仲間に対しての激励のコメントだと思いました。2日目第2分散会のコメントーターの青山学院大学香川秀太先生からは、よい仕事・よい職場を深めていく上で、「特異性=良さを引き出し活かしあう」ことを教えていただきました。特異性が意見として反映されると、他人に愛着がわき、より頑張れる力、もっと学ぼうと考え、自分の良さや価値を自ら発見していくことにつながっていきます。

2日間での集会を通じて、「雇われ者からの抜け出すこと」や「制度を超える実践」の2つの格闘を乗り換えてきた30年の物語は、組合員一人ひとりの中にあることを確信しました。

現在、子ども・子育てケアPJを推進する立場にいますが、「協同労働の子育て指針」を全国の仲間と1年半議論を重ね、2018年に完成しました。指針のベースは大田先生の「命」の特徴が主旨になっています。そして「根底的自発性」=「子どもは育ててあげる存在ではなく、子ども自身に自ら育つ力が備わっていること」を大切に、子どもは未来をつくる主体であることを前提として、子どもが育つ地域づくりを推進していきたいと思います。